

白駒妃登美の
なでしこ
歴史物語
25

日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 白駒妃登美

明治十年、貴族院（国会）議員の娘として生まれた鏡子は、裕福な家庭でのびのびと育ちました。十八歳の時、お見合いで漱石と結婚。天真爛漫で早起きが苦手だった彼女は、結婚当初、その寝坊ぐせを漱石に指

＊漱石の優しさに触れて

明治十年、貴族院（国会）議員の娘として生まれた鏡子は、裕福な家庭でのびのびと育ちました。十八歳の時、お見合いで漱石と結婚。天真爛漫で早起きが苦手だった彼女は、結婚当初、その寝坊ぐせを漱石に指

別れるつもりはありません

別れるつもりはありません

夏目漱石の妻・鏡子

古今東西を問わず、歴史上の偉人の奥さんが悪女だったという話はよく聞きます。例えば、かの有名なソクラテスの奥さんや、明治の文豪・夏目漱石の奥さんも、いわゆる「悪妻」といわれています。

確かに、後世の人々からみればそう思われても仕方ない面もあるのですが、では当

の漱石が鏡子を「悪妻」と思っていたかという点、決してそんなことはありません。

そこで、今回は漱石の奥さんが本当に「悪妻」だったのか、彼女に代わってその汚名を返上したいと思います（笑）。

摘されると「眠いのを我慢して嫌々家事をするより、しっかり睡眠をとってよい心で家事をするほうが経済的ではありませんか」と言い返したといわれます。後に、漱石の弟子たちがこうしたりとりを「鏡子悪妻説」の理由としたようです。

そもそも漱石はなぜ結婚相手に鏡子を選んだのでしょうか。彼女は歯並びが悪かったのですが、それを気にもとめず、笑う時にも口を手で覆うことがなかったそうです。繊細な性格の漱石は、こういう鏡子の天真爛漫さに惹かれたのでしよう。

その後、彼らは子供を授かりますが、残念ながら一人目は流産。それを気に病んだ鏡子は幻覚を見るようになり、入水自殺に及びます。それは未遂に終わるのですが、二度と自分のそばを離れないように、漱石はそれ以来、寝る時には自分の手首と鏡子の手首をひもでつないでいます。そんな漱石の優しさもあり、彼女は少しずつ心を落



夏目鏡子 貴族院書記官長を務めた中根重一の長女として生まれる。18歳の時に夏目漱石と見合い結婚し、後に二男五女を育てる。著書に『漱石の思い出』（文春文庫）。

【イメージイラスト】アオジマイコ